（右側）

釋教西昭玄受法
釋妙西受得宗眞
唯信妙慶

（正面）

元祿十六未年
双無一劔信士
二月初四日卒

（左側）

祐順自照信士
普聞了達信士

源五と樋口家とは如何なる關係にあるか當主二郎氏の談によると、源五の裔赤穗屋某が天川屋に奉公してゐた緣で建設したものとの家傳であるが、文獻もなく詳らかでない。棹石右側面の法號中唯信妙慶は四代甚右衞門の妾さち、五代甚右衞門の生母、他は何人か判らない。また左側面の祐順自照信士（安政二年九月四日）は赤穗屋長兵衞、普聞了達信士（天保十一年七月四日）は同吉兵衞と何れも赤穗屋で藥王寺の過去帳から右以外の赤穗屋を抄出すると識緣信士（安政六年七月六日）赤穗屋長兵衞、本性常圓信士（慶應四年三月十九日）同安兵衞があり、樋口家の過去帳には祐順自照信士と本性常圓信士の二つしか記帳がなく、墓石にある普聞了達信士を漏らしてゐ・赤穗屋に就ては何等の註記もない。

現在この源五の碑は大正十年、京都の松田勝二氏（樋口二郎氏の實姉ウノ刀自の婿）によつて修理が加へられ、花崗石で新しく二重の臺石を築き、その四圍には源五の辭世や介錯人氏名其他が彫刻せられてある。

大高源五ノ墓

並木宗輔の墓か

數年前から稻葉通龍翁の墓を探してゐた私は、昨夏稻葉家一族の墓のある本覺寺（天王寺區西高津中寺町）墓地の墓石を一々調べて遂に翁の墓を探し當てたほか、大阪訪碑錄に今所在を失ふと記錄せられてゐる有賀長因の墓をはじめ、傳ふるに足ると思惟せられる四、五基の墓を發見し、その中に並木翁輔所建の墓碑もあつた。然し當時私は此墓に就て深く研究するの時間がなく、其儘となつてゐたが、今般通龍翁顯彰法要擧行に際し、屢々寺を訪問す

る機會に惠まれ、檢討の結果、並木宗輔の墓らしく考へられるので、こゝにその一端を記して敢へて識者の教を請ひたいと思ふ。

棹石の正面は非常に崩れて、全然不明の文字もあり、判讀し憎いが、左記の通りで大體誤りはないかと思ふ。

（右側）

釋尊も十九で出家我も又　辭世
火宅の門の家出をばする

（正面）

梅屋院□□□□□（日清）カ　□□（妙）カ院宗輔
妙法□□（信照）カ院了德□□
櫻屋院妙正日淨　守玄院妙輔

（左側）

妙長信女　性相諦眞信士
玄々堂南嶺居士
智幻童子　嶺山智玄信女

（臺石）

元文元丙辰癸
並木氏
並木翁輔
初秋中旬建之

宗輔の行狀事績は暫らく措き、その歿年に就て考へるに、聲曲類纂の寛延二年、名人忌辰錄の寛延三年、劇場年鑑の寶暦元年の三說あり、寶暦說が一番有力であるが、これとて根本史料のある譯ではなく、法號、墓所なども筆者の寡聞未だこれを詳らかにしない。私が此墓を以て宗輔のそれに非ざるかとなす據點は、並木翁輔の所建なること、□妙院宗輔の法號のあることの二點に存するが、悲しい哉これを證明するの資料を缺く。墓石に歿年の鐫刻と寺に過去帳があれば問題は即決するが、墓石の文字は前揭の如く、寺の過去帳は燒失して享和二年正月以前のものは知るに術ない狀態である。今これを宗輔の墓と假定して問題となるのは所建年代である。宗輔の歿年を前記三說の何れにとるも元文元年は在世中で甚だ不都合である。然し寫眞で見る如く臺石の文字は並木翁輔の四字のみ書體が異り、追刻せられたこと明かなので、元文元年建設時は信照院のために建てたもので、辭世も恐らく信照院のものであらうが、後に他界した人々の法號を追刻し、同時に並木翁輔の文字も加へられたのではあるまいか。翁輔は前名を柳輔又は素柳とも云ひ、並木丈輔、同良輔、同正三らと共に宗輔の高弟で、翁輔と改名したのは寶暦四年十一月で、其後天明の初期師名を襲いで二代並木千柳を名乘つた人。元文元年に翁輔の名のある筈なく、師匠宗輔の歿するや哉こゝに合葬し、その法號を棹石に追刻した折、臺石にも亦己れの名を入れたものと信ずるのである要するに問題は簡單である、宗輔の法號が何かの文獻より判明しこれに一致するか否かによつて解決する。諸賢の教示をまつてやまない。因に云ふ、此墓は無緣墓として近く取除かれる運命にあつたが、寺僧に請ひ、よし宗輔のそれでなくとも元のまゝ保留して貰うことゝした。（後藤捷一）

二一

側面
俗名　岡木文彌
裏面
元文四未年五月八日（文彌の妻か？）
寶永六丑年正月十五日（文彌の子）
元祿七甲戌正月十一日（文彌）

一心寺墓地に於ける淨瑠璃「文彌節」の始祖
岡木文彌の墓碑、清譽淨鑑信士（文彌）

碑表　大　撰（後藤氏記事參照）

淨瑠璃作者並木宗輔の墓か？